

参考資料

「広島県学びの基盤に関する調査」 を活用した児童の学びへの支援について 《改訂版》



広島県教育委員会義務教育指導課
令和5年7月

「参考資料」の構成について

広島県教育委員会では、平成 30 年度から令和 2 年度にかけて、「学力フォローアップ校事業」として、県内 20 の小学校を「学力フォローアップ校（以下、「F U校）」に指定し、その協力の下で「広島県学びの基盤に関する調査」の開発を進めるとともに、児童の学力等の課題の解決に向けた実践的研究に取り組んで参りました。

令和 3 年度からは、「小学校低学年段階からの学ぶ喜びサポート校事業」として、県内 22 校の小学校を指定し（以下、「サポート校」）、F U校の取組を参考とした指導の改善を進めております。各サポート校においては、「広島県学びの基盤に関する調査」を活用し、小学校低学年段階からの個別の支援に取り組んでいるところです。

この「参考資料」では、「広島県学びの基盤に関する調査」の結果から予想される児童の学習の「つまずき」と、それらに応じて考えられる支援の手立てを例示しています。支援の手立てについては、両事業の指定校において実際に取り組まれた事例も数多く紹介しています。

なお、「参考資料」でお示ししている手立ては例示であり、各校におかれましては、「参考資料」に示した手立てを参考にしながら、自校の児童の実態や状況を十分に分析し、支援に取り組んでいただきますようお願いいたします。

ことばのたつじん その〇

【調査からわかること】・・・・・・・・・・・・・・・・ついて



この調査からわかることを記載しています。

- ① これらの問題ができない場合、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
 - ・・・・・・・・・・・・・・・・が身に付いていない
 - ・・・・・・・・・・・・・・・・ができていない。 等

- ② 今後の学習等において、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
 - ・・・・・・・・・・・・・・・・が解けないことが考えられる。
 - ・・・・・・・・・・・・・・・・が分からないことが考えられる。 等

- ③ ②のつまずきに対して、どのような手立てが考えられるでしょうか。
 - ・・・・・・・・・・・・・・・・の指導を行う。
 - ・・・・・・・・・・・・・・・・にしていく。 等

○ ①～③では、予想される「つまずき」、予想される「今後の学習等」のつまずきとそれに対する手立てを記載しています。

○ ここで記載している内容は一例です。これを参考にしながら、児童の実態に合わせて是非校内で協議をして下さい。

指定校の実践事例

- ・・・・・・・・・・・・・・・・への取組（第〇学年）
- ①
.....。

 - ② 児童の変容
.....
.....

上記の③に関連する、F U校・サポート校での実践事例を紹介しています。

ことばのたつじん その1

【調査からわかること】

○語彙の広さについて



- ① これらの問題ができない場合、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・ 基本的な語彙が身に付いていない。
 - ・ 日常生活の会話で使う言葉を獲得できていない。 等
- ② 今後の学習等において、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・ 算数科などの文章題が解けないことが考えられる。
 - ・ 問題文で問われていることが分からない可能性がある。
 - ・ 会話の中で分からない言葉が多いと、話についていけないことが考えられる。
 - ・ 作文などを書くとき、適当な言葉を選ぶことができない可能性がある。
 - ・ 文章の要点をつかめない可能性がある。
 - ・ 学年が上がるにつれ、学習全般の苦手意識が高まることが考えられる。
 - ・ 読書が嫌いになることが考えられる。 等
- ③ ②のつまずきに対して、どのような手立てが考えられるでしょうか。
- ・ (文字の習得ができていない可能性があるため) 平仮名や片仮名の指導を行う。
 - ・ 絵本などの読み聞かせで、言葉とその意味がつながるようにしていく。
 - ・ 「言葉カード」「言葉クイズ」「なぞなぞ」など遊びの中で、語彙を増やしていく。
 - ・ 絵や図によって、言葉の意味をイメージで捉えさせる(視覚的支援)。
 - ・ 先生の話の中でいろいろな言葉に出合わせるなど、会話の中で語彙を増やす。
 - ・ 日記等で文字を通して伝える楽しさを味わう場面を設定する。
 - ・ 低学年のうち、難しい言葉(あまり触れない言葉)が出たら、教師が言い換えて意味を伝える。言葉の意味を類推できるような支援も考えられる。
 - ・ 言葉の意味が分かっているかを確認する。→分かっていない場合は、語彙獲得のチャンスである。
 - ・ 意味の分からない言葉を○で囲むなど、「分からない」という意思表示をさせる。
 - ・ 意味が分からない言葉が出たときは、それを聞くことができる学級風土をつくる。
 - ・ 友達が学習場面で困っていると分かったときに、「どうしたの?」「どこが分からないの?」と声を掛けることができる子どもを育成する。 等



指定校の実践事例

平仮名が読めない児童への取組（第1学年）

- ① 国語科の授業の始めや終わりの時間、ドリルタイムの時間（5分間）を使い、平仮名読みに取り組みました。事前に児童一人一人について、「五十音表」を使い、平仮名が読めるかを把握しておきました。

手元に置いた「五十音表」のプリントを見ながら、平仮名を一音ずつ読みました。この時、教師は課題が見られる児童のそばについて、読めない平仮名の読みを教えました。

② 児童の変容



この取組を始めた時には、29文字の平仮名が読めていませんでしたが、この取組を継続した結果、2週間後には読めない平仮名が5文字になりました。月末には五十音全ての平仮名を読めるようになりました。

指定校の実践事例

平仮名や片仮名を書くことが難しい児童への取組（第1学年）

- ① 放課後補充学習において、「なぞり書き」「指で押さえ」「ホワイトボードの活用」「プリント」などの方法で平仮名や片仮名の習熟を目指しました。教師は正しく書けているかを確認しました。

・なぞり書き

筆順に気を付けて
1、2と声を出しながら
なぞらせる。



・ホワイトボードの活用

教師が言った文字や
言葉を書く。できるだけ
身近な言葉にする。



・指で押さえ

教師が言った文字や
言葉を押さえる。



・プリント

授業の進度などに合わ
せた言葉や身近な言葉
にする。



② 児童の変容

意識して、筆順に気を付けて書こうとしたり、声を掛けると「あっ、こうだった。」と素直に直したりする姿が見られるようになりました。また、字をなぞったりホワイトボードに書いたりすることに興味をもち、毎回楽しく取り組むことができました。

指定校の実践事例

語彙の習得につまずきのある児童への取組（全学年）

- ① 放課後の補充学習等において、「言葉絵カード」を使って言葉と絵のマッチングをさせました。毎日、時間を計って、児童は1つずつ絵を見ながらその名前を答えました。この「言葉絵カード」については、果物・野菜・動物・乗り物など、児童の生活になじみのあるものの絵カードを用いました。

- ② 児童の変容

言葉を素早く思い出して答えることを大切に取り組みました。語彙も増えるとともに、児童からは「言葉を早くいっぱい言えるようになった。毎日先生と一緒にやって楽しかったよ。」という声がありました。



指定校の実践事例

漢字を正しく覚えることが難しい児童への取組（全学年）

- ① 漢字イラストカードの音読を繰り返し行いました（1回につき10枚程度）。



① 漢字とイラストを対応させて漢字を読む。

② イラストを見て意味を言う。

③ 漢字だけを読む。

④ ①～③を繰り返した後、漢字を指書きする。

イラストを見て、漢字・熟語を読めるように音読を繰り返しました。「漢字とイラスト」「イラストだけ」「漢字だけ」で読むという変化のある学習により、飽きずに繰り返すことができました。

- ② 児童の変容

上記の学習を1か月繰り返した後、漢字の指書きを行うと、漢字の定着しにくい児童の多くが、漢字の読み書きができるようになりました。児童からは「漢字カードを読んだら、漢字が頭に入ります。」「漢字テストで高い点数を取ることができた。」という声がありました。

漢字の指書きは、その場で確認でき、形が違っている場合は、修正しやすく、書くことの抵抗感が減らしました。なお、漢字の指書きでは、書き順にはこだわらないようにしました。

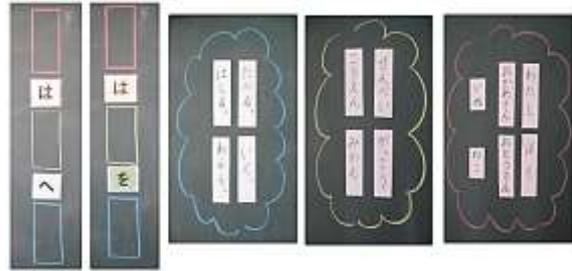


担任

指定校の実践事例

「は」「を」「へ」を正しく使えない児童への取組（第1学年）

- ① 「主語を表すカード」「目的語となるカード」「述語を表すカード」を用意し、文を作る手立てとしました。どこに何を入れたらいいのか分からない児童のために、色分けをしておき、ピンク・黄・青のそれぞれの枠には、それぞれの色の中から選ばれよいように掲示しました。



② 児童の変容

- ・どのように「は」「を」「へ」を使えばよいか分からない児童も、色分けをしたことで選択肢の中から選び、正しく「は」「を」「へ」を使った文を作ることができました。
- ・「は」「を」「へ」を使って作った文を、ペアトークで話したり、聞いたりする中で、助詞の使い方に慣れることができ、自分でも正しく文を作ることができるようになりました。



指定校の実践事例

自分から読んだり、書いたりできない児童への取組（第1学年）

- ① 語彙が少なく、一字一字の拾い読みをする児童は、文章の内容を理解することが難しく、語句の意味も理解できていない状況にあります。その児童に対しては、「視覚化」が有効であると考え、具体物を見せながら考えさせる等の活動を行いました。

国語科「じどう車くらべ」の学習において、「何種類の自動車が紹介されていますか。」「～の答えはいくつありますか。」という問いをしました。

児童に対して、教材を一枚にまとめ、事例と写真をマッチングさせるという手立てを行いました。ここでの支援のポイントは、「教材文を一枚にまとめることにより全体が一目で見えるようにしたこと」「写真を手掛かりにして、数えさせること」「事例ごとにまとまりと写真をマッチングさせ、色鉛筆で囲ませること」です。



② 児童の変容

文章に書いてあることを具体物やイラストで示したり、文章を動作化したりすることで、児童は言葉を理解し、自動車の仕事とつくりを理解することにつながりました。また、文章を理解することにより、自分の考えをもち、それをみんなの前で発表することができました。そのことが自己肯定感につながり、学習意欲を高めました。

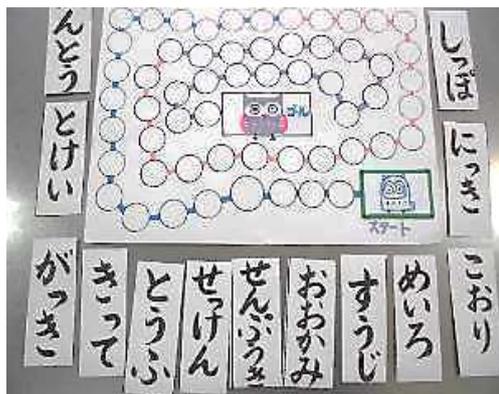
指定校の実践事例

特殊音節を含む単語（平仮名）の読み書きが定着していない児童への取組（第1学年）

- ① 「特殊音節を含む単語カード（平仮名）」を使って、すごろくゲームをしました。

<やり方>

- ・単語カードを裏返して積み重ね、児童が上から順番に取る。
- ・児童が、取ったカードを読み、すごろく台紙上で文字分だけコマを進める。
- ・早くゴールした児童が勝ちとする。



- ② 児童の変容

このすごろくを実施し、2週間程度で、児童は特殊音節を含む単語を正しく読み書きできるようになりました。

このような姿になったのは、意味理解語彙が増えたことが背景として考えられます。また、すごろく遊びの要領が分かった段階で、児童に追加のカード（片仮名）を作成させたところ、自ら教科書等にある特殊音節を探す姿も見られました。

指定校の実践事例

ひらがなの文字を覚えることが難しい児童への取組（第1学年）

- ① 児童が自らの学習状況を把握できるよう、次のような手立てを行いました。

ア 児童の机の横に「ひらがなの五十音表」を掛けておき、児童自身が必要に応じていつでも表を見て文字を書くことができるようにしました。同時に、自分で表を出して見ることを意識付けました。

イ 「読めないカード」「書けないカード」を作成し、それを使い練習しました。読めるようになったり、書けるようになったりしたカードは外していきました。残りが少なくなるにつれ達成感を得ることができました。また、覚えていないカードを児童自身が確認できるようにしました。



- ② 児童の変容

興味をもちながら、主体的に文字を覚えようとする姿が見られました。その後、日常的に「読む」「書く」ことを積み重ねていくことでひらがなを覚えることができ、意欲的に文字を書くようになりました。全文を視写して絵を描く学習では、言葉のまとまりを読み取り、本文を何度も見ないでも早く書き写すことができ、その後は、詩に合わせた絵をどんどん描いていました。

指定校の実践事例

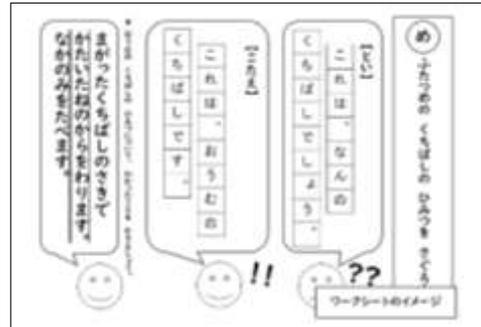
大事な語句や文章を見付けることが難しい児童への取組（第1学年）

① 国語科の説明文の学習において、次のような手立てを行いました。

ア 「問い」と「答え」の形式を意識できるよう、「問い」＝「はてな坊や」と「答え」＝「はかせちゃん」というマスコットを掲示し、そのマスコットを毎時間掲示することで、児童が「問い」と「答え」を想起しやすくなるようにしました。

イ 単元ごとに、3枚のワークシートで構成するようにしました。1枚目は全体で書き方を確認し、2枚目以降は自力解決するという流れで授業を行いました。大事な語句や文章を見付けることができるよう、ヒントカードを準備し、それを見ながら書き込むようにしました。

ウ まとめでは、授業で分かったことを自分の言葉でまとめる時間を設定しました。書き出しや書き終わりの例を示し、ワークシートやノートにまとめていきました。



② 児童の変容

「はてな坊や」と「はかせちゃん」が定着したことで、「はてな坊やは問いだったよね。」「ここには答えが書いてあるから、はかせちゃんだ!」といった発言が聞かれるようになり、児童が「問い」と「答え」の形式に苦手意識をもつことがなくなりました。ワークシートに大事な語句や文章を書き込むことで、読むだけでは不十分であった内容も理解することができるようになりました。最初はヒントカードを見ながら書きこんでいた児童も、3枚目には書き方を理解し、自力で書けるようになりました。

指定校の実践事例

日常会話で使う語彙が獲得できていない児童への取組（全学年）

① 語彙の量を増やすために、次のような手立てを行いました。

ア 毎日、詩の音読を行いました（例 北原白秋『五十音』）。

音読をするにあたり、母音の口形及び発音、発声についての指導を行い、一音一音を識別させ、安定した発声や明瞭な発音を意識付けました。

イ どのような語彙を獲得しているかを把握し、指導に生かしました。

意味が分からない言葉は○で囲ませました。分からない言葉は教師が言い換えるなどして、意味理解を図りました。また、言葉の意味が体験をもって理解できるよう、動作をつけて音読をしました。

動作化を行うことで、児童のつまづきを把握することにもつながりますね。



② 児童の変容

少しずつではあるが、児童は言葉のまとまりで文章を読むことができるようになるとともに、言葉の意味理解ができるようになりました。このことにより、自ら本を読もうとする姿も見られるようになりました。また、単元テストにおいて、問題文の意味が少しずつ理解できるようになりました。

ことばのたつじん その2

【調査からわかること】

- 視点を自在に変えてことばを使う力について
- 数学や理科で必要な概念を表す基本的なことばや単位の知識について



- ① これらの問題ができない場合、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・空間認識に弱さがあったり、イメージ化することに苦手意識があったりする。
 - ・視点を変えて捉えることが難しい（例 右左、前後、表裏等）。
 - ・「一つ目」、「何番目」といった順序をどこに基準を置いて数えたらよいか分からない。
 - ・抽象的なことについて理解できないことが考えられる。
 - ・マイナス、割引に対する経験や概念がない可能性がある。
 - ・基本的な時間や日にちの知識がない。
 - ・数について量感をもって捉えていないと考えられる。
 - ・語彙力が不足している。 等
- ② 今後の学習等において、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・算数の「A 数と計算」「C 測定」に関わる問題全般でつまずきが考えられる。
 - ・計算したものを見直しても、間違いに気付きにくい可能性がある。
 - ・繰り上がりによる単位の変化、概算や割合等が捉えられない可能性がある。
 - ・低学年においては、「時計」の学習でかなりつまずくことが考えられる。
 - ・図形を適切に捉えること、また図を様々な角度から理解することができないことが考えられる。
 - ・グラフや表等の読み取りができない可能性がある。
 - ・方位、地図、天体の学習をするときに理解が難しい可能性がある。
 - ・マップの作成等において、図化できなかつたり、適切な位置に建物等を書き込めなかつたりする可能性がある。
 - ・相対的に物事を見取れなかつたり、抽象的な思考の基本ができなかつたりすることが考えられる。
 - ・授業中の指示や問いが、何について話されているのか理解できない可能性がある。
 - ・先生や友達の説明を整理しながら聞いたり、相手の立場を考えて話したり、筋道を立てて説明をすることができないことが考えられる。
 - ・見通しをもって物事に取り組むことができない可能性がある。
 - ・必要な言葉を用いて文章を作成するという活動ができない可能性がある。
 - ・事象をカテゴリーに分類したり、整理したりすることができないことが考えられる。
 - ・学校行事等での指示が入らないことが考えられる。整列の際に、「右に○歩寄って。」等の指示が理解できず、逆に動いてしまい、指導を受ける可能性がある。 等

③ ②のつまずきに対して、どのような手立てが考えられるでしょうか。

- ・デジタル機器を活用してアニメーションを表示したり、具体物を操作したりしてイメージをもたせる。
- ・身近なイメージできるもの（例えば、特別教室や体育館の位置や道順等）を使い、実際の方向と紙面上の方向をつなぐ取組を行う。
- ・数え方の確認をする。例えば、「1日後は〇月〇日。2日後は…？ 5日後は…？」と順に考えさせる。
- ・遊びの中で、視点を変えて物事を捉える活動を行う（例 鏡を使って手旗信号遊びをする。ラジコンを操作する。多様な選択肢のあるすごろくをする。等）
- ・様々な形の中から同じ形を見付け、理由を考えるゲームを行う。
- ・一定の文脈の中で、見る視点を変えて具体物を説明する学習活動や、「説明書を書いて紹介しよう」といった学習活動を設定する。
- ・イラストを見ながらフィールドワークを行う。
- ・具体と抽象を合わせて指導を行う。
- ・マイナスや割引の経験や概念がないことを踏まえて、体験や具体的な場面設定の中でマイナスや割引の概念を形成させる。
- ・長さや重さなどを、増やしたり減らしたりして実際にはかる活動を行う。
- ・カレンダーを使い、学校行事をゴールとしたスケジューリングを行う。
- ・簡単なイベントを企画する。
- ・時計やカレンダーを使ったクイズを行う。
- ・フラッシュカード、マッチング等の数遊びを行う。 等

指定校の実践事例

辺の長さに着目することが難しい児童への取組（第4学年）

① 算数科「面積」の学習において、長方形や正方形の面積を計算で求める方法を考え、公式を導くことを目指し、次のような手立てを行いました。

ア 方眼シートによる視覚的支援により、 1cm^2 を数えれば面積を求めることができることに気付かせるようにしました。

イ 「方眼入りの長方形」「方眼の上に重ねた長方形」を提示することにより、辺の長さが方眼の個数であることに気付かせるようにしました。

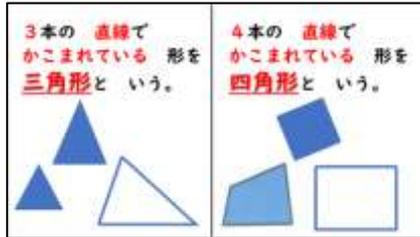
ウ かけ算の意味に帰着させ、ペアで「 1cm^2 のいくつ分」の考え方をういて説明を行わせ、考えを言葉でまとめさせるようにしました。

② 児童の変容

・「方眼入りの長方形」や「方眼の上に重ねた長方形」を提示したことにより、辺の長さに着目することができました。また、 1cm^2 を意識し、「縦5マス（ 5cm^2 ）が〇つつある」と説明することができました。

・事前のプレテストでは、長方形や正方形の周りの長さに着目できませんでしたが、学習後の適用題では、長方形や正方形の辺の長さから面積を求めることができました。

- ① 算数科「三角形と四角形」の学習において、三角形や四角形の定義を根拠として、弁別の理由を説明することを目指して授業を行いました。「辺や頂点を意識して、三角形や四角形をかくことができない」児童に対して、次のような手立てを行いました。
 - ア デジタル機器を用いて、三角形と四角形の定義を確認しました。
 - イ 図形カードを用いた算数的活動を取り入れました。
 - ウ ヒントカードを用いて、定義を確認しました。



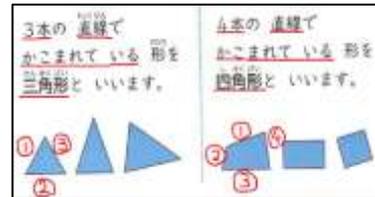
三角形と四角形の定義の確認



図形カードを用いた算数的活動

② 児童の変容

- ・ 図形の定義についてデジタル機器を使って視覚的に確認させたことは、図形の定義や課題について理解をすることにつながり、課題に対する取りかかりもスムーズになりました。
- ・ ヒントカードを手元に置いて学習を進めたことで、児童は常に図形の定義を確認することができました。
- ・ ワークシートに選んだ理由を書かせたことで、児童は図形の要素に着目しながら、図形を分ける基準を明確にもって弁別できました。



ヒントカードで定義を確認

- ① 体育科「器械運動 マット運動・跳び箱運動」において、自分の課題を見付けて、計画的に技の習得をすることができるよう、次のような手立てを行いました。
 - ア 学習計画を自分で立て、見通しをもって学習に取り組ませました。その学習計画に基づき、必要な練習について助言しました。
 - イ タブレットを活用して自分の演技を振り返ったり、教師の見本を動画やコマ送りの画像を見たりできるようにしました。
 - ウ 技を習得しやすいよう、スモールステップの場を設定しました。



② 児童の変容

取り組みたい技や練習方法を選択し練習したことで、恐怖心を克服し、繰り返し挑戦して技を習得できました。また、デジタル機器の活用により、自分の動きを客観的に見ることができ、できた所やできなかった所を自分で考えて練習するようになりました。

指定校の実践事例

表から、伴って変わる2つの量の特徴を読み取る事が難しい児童への取組（第6学年）

- ① 算数科「比例と反比例」の学習において、比例の関係を見出すことに向けて、次のような手立てを行いました。

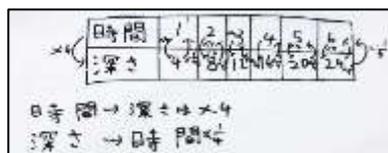
ア 見通しのもてる具体物を使用

画用紙 300 枚を数える活動をしたことで、児童は「もっと簡単に枚数を求める方法はないだろうか。」という思いをもち、「比例の考えを使って求めてみたい。」という単元の見通しをもつことができました。



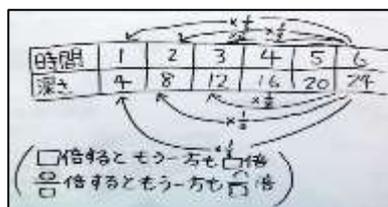
イ 既習内容を自力解決の時間に活用

児童は、表をまとめたり、数量の変化を読み取ったりする自力学習の際に、掲示物を見ながら考えをまとめることができました。



ウ 考えを伝えるための工夫

考えの根拠を明確にするため、「比例と反比例」の学習においては、表を活用したり、矢印を記入したりして相手に伝えるという工夫を取り入れました。



- ② 児童の変容

画用紙 300 枚を簡単に数えることと関連するという話題を単元のはじめに伝えたことで、伴って変わる2つの量や比例の特徴を見付けるために、表を利用する児童が多くなりました。特に、表の縦や横に矢印を記入し、「2倍、3倍…」と多くの児童が数量の変化を書き込み、比例していることの根拠を明確に示し、説明することができました。

指定校の実践事例

式と計算を結び付けて考えることが難しい児童への取組（第1学年）

- ① 算数科「たしざん・ひきざん」において、立式はできてもブロックを並べる際に迷ったり、手が止まったりする様子が見られた児童に、次のような手立てを行いました。

ア 式とブロック操作を結び付けるため、ブロックボードの下に式を書くためのシートを貼り付けました。

イ シートはラミネートし、ホワイトボード用のペンで書いたり消したりできるようにしました。

ウ ブロックは縦に置き、シートに書いた式と対応させながら動かすようにしました。



- ② 児童の変容

ブロックシートの活用により、どの児童も式の数字を見ながらブロックを動かすようになり、間違いや手が止まることが少なくなりました。また、ブロックの並べ方を統一したことで、説明し合う活動もスムーズに行え、理解も深まりました。

指定校の実践事例

時間・時刻の理解が難しい児童への取組（全学年）

- ① 時間・時刻を使った表現を理解するため、学習活動を行う際、時間や時刻を意識するような言葉かけを意図的にしました。

例) あと△分で終わろうと思うと、何時何分になりますか。

- ② 児童の変容

自力解決を始める際、タイマーをセットし「今から〇分で終わってください。」と伝えました。常に時間を意識させることにより、「〇分では少ないから、△分にしてください。」などの声が出るようになり、時間を量感をもってとらえることにつながりました。

また、「今、〇時△分です。12時まで何時間何分ありますか。」と適宜問うことにより、時計の文字盤を見ながら時間を数える経験が増えてきました。長針を5飛びで数えることにも慣れてきました。

「アナログの時計」や「カレンダー」が家庭にないため、これらを身近に感じることができないという実態もあります。
この事例のように学校生活の中で時計やカレンダーを使って考える機会を増やすことは大切です。



指定校の実践事例

抽象的なことの理解が難しい児童への取組（第2学年）

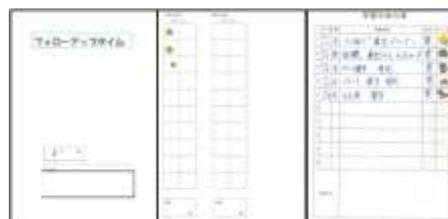
- ① 授業・放課後の個別指導において、次のような手立てを行いました。

ア 授業における視覚支援の工夫

毎時間、ノートと同じ板書を計画し、ノートを書きやすくしました。また、視覚支援（デジタル機器、具体物、挿絵等）を行い、イメージをもたせやすくしました。

イ 放課後の個別指導

国語（本読み、漢字）、算数（復習プリント、宿題、予習）に取り組み、授業以外で学習の定着を図りました。「学習の記録（右写真）」にシールを貼ることにより達成感をもたせました。



学習の記録の例

- ② 児童の変容

ノートの字が丁寧になり、めあてから振り返りまで書くことができるようになりました。また、学習に関わる振り返りが書けるようになりました。

<加法について>

- ① 算数科「たしざん」（1 位数同士の繰り上がりのある加法）において、「10 の補数を暗記して使えるようになっていない児童が多い」「1～9 の合成分解ができにくい児童がいる」「1 位数同士の繰り上がりのない加法で、指を使って計算している児童が多数いる」等の児童の実態があり、次のような手立てを行いました。

ア 10 の補数を見付けるヒントカード①を用意しました。

イ 1～9 の数の合成分解ができるヒントカード②を用意しました。

ウ さくらんぼ計算でつまずいている児童に、個別の支援として、ヒントカードを渡し、計算ができるようにしました。

	$10 = 1 + 9$
	$10 = 2 + 8$
	$10 = 3 + 7$
	$10 = 4 + 6$
	$10 = 5 + 5$
	$10 = 6 + 4$
	$10 = 7 + 3$
	$10 = 8 + 2$
	$10 = 9 + 1$

ヒントカード①

	$2 = 1 + 1$
	$3 = \square + \square$
	$4 = \square + \square$
	$5 = \square + \square$
	$6 = \square + \square$
	$7 = \square + \square$
	$8 = \square + \square$
	$9 = \square + \square$
	$10 = \square + \square$

ヒントカード②

- ② 児童の変容

ア ほとんどの児童が指を使わず、さくらんぼ計算で繰り上がりのあるたし算ができるようになりました。

イ 数の分解ができにくい児童も、ヒントカードや指を使って分解できるようになりました。

ウ フラッシュカードや計算カードを毎日繰り返すことで、10 の補数、数の分解は、ヒントカードがなくてもできるようになりました。

<減法について>

- ① 算数科「ひきざん」（1 位数同士の繰り下がりのある減法）において、「指を使って計算している児童が少しいる」等の実態があり、次のような手立てを行いました。

ア 10 の補数を見付けるヒントカードを用意しました。

イ 1 位数同士の繰り上がりのない加法のヒントカードを用意しました。

ウ さくらんぼ計算でつまずいている児童に、個別の支援として、ヒントカードを渡し、計算ができるようにしました。

- ② 児童の変容

ア ほとんどの児童が指を使わず、さくらんぼ計算で繰り下がりのあるひき算ができるようになりました。

イ フラッシュカードや計算カードを毎日繰り返すことで、ヒントカードがなくてもほとんどの児童ができるようになりました。

ことばのたつじん その3

【調査からわかること】

○似たことばの違いを理解し、文法や表記の知識と統合して、
文脈でもっとも適切なことばを使う力について



- ① これらの問題ができない場合、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・正しく言葉を理解できておらず、思い込みで補填してしまっている可能性がある。
 - ・語彙力が不足している。使いこなせる言葉が少ないと考えられる。
 - ・文脈に合わせ、自動詞や他動詞の使い分け、ふさわしい言葉の選択ができていない。
 - ・似ている言葉の細かい意味の違いを捉えることや場面に最も相応しい言葉の選択が難しい。
 - ・間違っ理解している言葉がある。
 - ・言葉の意味に伴う生活経験が不足している。 等
- ② 今後の学習等において、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・作文等を書くとき、内容が乏しい文章になってしまい、自分の考えを表すことができない可能性がある。
 - ・物語の情景をイメージできなかつたり、登場人物の心情を読み取ったりすることができない可能性がある。
 - ・スピーチやグループ内での交流において、伝えたいことを正確に表現できない可能性がある。
 - ・文章の要点がつかめなかつたり、重要なキーワードに気付かなかつたりする可能性がある。 等
- ③ ②のつまずきに対して、どのような手立てが考えられるでしょうか。
- ・遊びの中で、動きと言葉をつなげ、知っている動詞の数を増やす。
 - ・絵本等を含め、読書の機会を増やす。
 - ・描写や考えを説明させる機会を増やす（作文や日記等）。
 - ・様々な場面で視覚的な資料の提示を行う。
 - ・文章を読み、自分の解釈があっているかを振り返る習慣を付ける。
 - ・教師は短い言葉で話したり書いたりする。また、児童から言葉が出てこない時には、教師があてはまりそうな言葉を提示する。 等



① 国語科「どうやってみをまもるのかな」の学習において、毎時間、次のような流れで授業を行いました。

ア 教科書を音読し、動物の身の守り方について知ります。

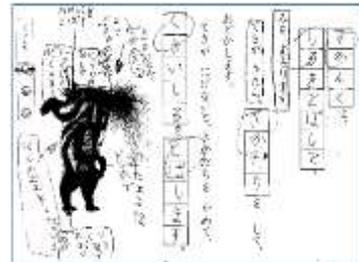
イ 全員で動物の名前を確認し、ワークシートに記入します。

ウ 動物の体の特徴について抜き出します(「どのようにしてみをまもるのでしょうか。」をてがかりにして探す。)

エ 書き終えたら、絵から分かること、文章から分かることを記入します。

オ 敵が来た際の行動について抜き出した後、動作化により行動の確認をします。

カ エと同様。全体で発表し、共有します。



② 児童の変容

- ・「読む・抜き出す・絵に書き込む」という活動を繰り返し行うことで、児童は学習の流れや抜き出しの手がかりが分かり、自力で書くことができるようになりました。
- ・絵や文章から分かることを書き込む活動を行ったことにより、児童は、大事な語句や文を見付け、気付きも書けるようになりました。

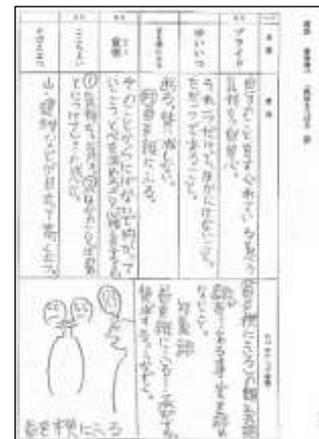
① 語彙の量を増やし、話や文章の中で使えるようにするため、次のような手立てを行いました。

ア 意味調べを発展させました。

教材文の重要語句を中心に意味調べをしました。また、レベルアップしたい語句を選び工夫して学習しました。

イ 語句の量を増やす漢字ミニテストを実施しました。

ドリルにはない語句を交えて、教師が問題文を作成しました(1回5問)。授業始めに一斉に実施し、児童は合格するまで休憩時間等を利用して取り組みました。



② 児童の変容

語句の意味理解や、文字の細かな部分への意識が高まりました。

漢字ミニテストについては、平仮名で問題文を書くことにより、児童は言葉や文の意味を考え、それに合う漢字を選択して書けるようになりました。また、問題数が少ないので、苦手な児童も抵抗なく取り組み、漢字学習の意欲が高まりました。



文の構造を考え、文から必要な情報を選び、表現を工夫して書くことが難しい児童への取組（第5学年）

① 国語科「固有種がおしえてくれること」「グラフや表を用いて書こう」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア 書くことに生かすための教材文の読み取りについて

- ・「固有種」というものを理解するため、写真や動画を提示しました。
- ・板書にはキーワードをカードにしたり、「問い」「重要な言葉」を色分けしたりするなどの視覚的支援を行い、教材文の読み取りをさせました。
- ・キーワードカードを基に、筆者の書き方で注目させたい部分をあらかじめ選び、「なぜこのような書き方をしているのか」「このような書き方をする必要があるのか」といった筆者の表現に対する自分の考えや思いをもたせるよう、討論を適宜取り入れました。

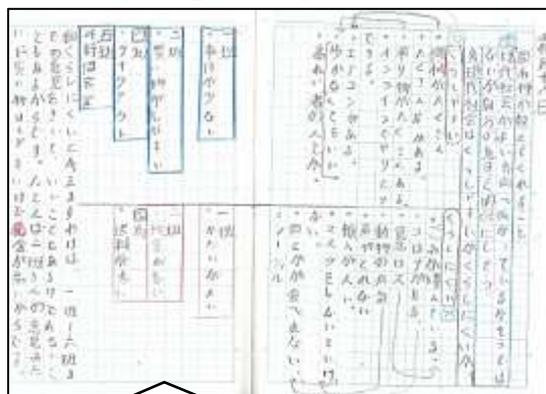


イ 自分の意見を明確にするための討論について

- ・「現代社会が暮らしやすいか」というテーマに対し、自分の意見を明確にさせるため、「暮らしやすい」「暮らしにくい」のそれぞれに対する具体例について、討論させながらたくさん挙げさせました。
- ・いくつも具体例を選ぶと、資料を読み取る際に情報が混在したり、文を書く際に文章の構造が崩れたりしてしまうため、児童に具体例を一つ選択させました。

ウ 自分の考えを書くことについて

- ・教科書の例文や筆者の書き方から、どのような構造で書くと読み手に伝わるかを考え、グループで話をさせました。
- ・筆者の書き方で良いと思うところを必ず取り入れさせました。
- ・語彙を増やすため、熟語しりとりをさせたり、分からない言葉は必ず辞書で引かせたりしました。



【討論をした際の児童のノート】

個人思考の段階では、意見が一つしか出ていなかったが、友達と討論を重ねる中で、考えを広げることができた。

② 児童の変容

クラス全体として、読み手を納得させるために、筆者の表現方法を参考にしようとは何度も教科書やノートを見返す姿が多く見られました。また、書く活動の中で辞書を何度も引く姿が見られました。

国語科のアンケートの結果で、「文章を読んで大体の内容が分かる児童」、「筆者の考えに共感したり、疑問に思ったりしながら、自分の考えと比べている児童」の割合が増えました。

- ① 第2学年を対象とした、「広島県学びの基盤に関する調査」のうち、「ことばのたつじん その1・3」を第1学年においても実施し、客観的なデータを集めました。

【第1学年全体（7月実施）】

ことばのたつじん その1（語彙）		ことばのたつじん その3（動きことば）	
正答率	「？」の回答率	正答率	「？」の回答率
34%	23%	27%	24%

- ・ 7割程度の児童が、言葉の意味や理解が不十分で、誤認識している言葉がある。
- ・ 毎時間の授業の説明や友だちの話などが分からない状態で過ごしている児童がいる。
- ・ 場面に応じて動き言葉を使い分けができる児童は少ない。

第1学年の児童の実態として、話を聞く際に、言葉を正しく理解することが難しく、学習のつまずきが見られる児童が多いため、次のような手立てを行いました。

ア 遊びを通して語彙を増やしました。

あいうえおカルタ / ひらがなすごろく / カードとり / 言葉づくり

イ 「あいうえお表」「拗音表」「カタカナ表」を活用して、わからない文字を自分で調べました。

ウ 児童が「わからない」と感じたとき、すぐに質問し、その場で問題解決をしました。

エ 新たな課題は、児童の経験したこと、知っていることや興味を基に説明しました。教師は、休憩中の会話や日記などから児童に伝わる言葉、興味や関心、経験していることなどを把握しました。

オ 情報過多にならないよう、話し方に配慮しました。

教師が話し過ぎず、大量に板書をしないようにしました。ノートをプロジェクタに写し、同じように書くことで、どこに書けばよいか分かるようにしました。

カ 読解の支援を行いました。

読むときには、児童が「だれ」「いつ」「なに」「どのように」「なぜ」を意識できるように、5W1Hの質問をしました。

キ 朝のスピーチを行いました。

- ② 児童の変容

7月に実施した「ことばのたつじん その1・3」を1月にも実施しました。徐々に言葉の意味を正しく理解してきています。「ことばのたつじん その3」は身近な言葉であったため、正答率が上がったと考えます。「？」と回答する児童が減っていることは、言葉に対し、自分なりに推論して考えようとする児童が増えていることが伺えます。

【第1学年全体（1月実施）】

ことばのたつじん その1（語彙）		ことばのたつじん その3（動きことば）	
正答率	「？」の回答率	正答率	「？」の回答率
48%	5%	56%	7%

指定校の実践事例

基本的な語彙が身に付いていない児童への取組（第2学年）

① 「言葉に伴う生活経験が少ない。」「言葉について細かい意味の違いを知らない。」という児童実態に対して、次のような手立てを行いました。

ア 言葉カードを使い、言葉の意味や反対の言葉を確認しました。

フラッシュカードのようにし、指導者の後に言葉を復唱することで、多くの言葉に触れられるようにしました。児童にとって親しみのない言葉については、指導者が児童に分かる言葉で意味を解説しました。



イ 言葉カードに出てくる言葉を動作化しました。

音と動作を合わせて理解することができるように、「立つ・座る」「右・左」など、動作化することができるものは児童と動き方を考え、動作化しました。

ウ 絵と言葉を一致させました。

児童が言葉に慣れてきたら、絵だけ見せて言葉を答えたり、言葉を見て絵を選んだり、指導者が言った言葉を動作化させたりしました。

エ 普段の生活の中で意識的に位置を表す言葉などを使用しました。

児童に指示を出す際、「プリントは右側に置く。」など、生活の中で指導者が意識的に位置を表す言葉などを使い、児童が考えて動くことができるようにしました。

② 児童の変容

「広島県学びの基盤に関する調査」で、「にていることば」の正答率が33%だった児童は、国語の市販テスト「言葉」において、3学期は全国比113%でした。

取組を始めた段階では、否定的な発言をしていましたが、繰り返し行い、言葉を覚え、言葉の意味が分かるようになると、「次はいつやるん？」と意欲的に取り組む姿が見られるようになってきました。



指定校の実践事例

言葉や言葉の意味を知らない児童への取組（第2学年）

① 国語科「にたいみのことば はんたいのいみのことば」において、次のような手立てを行いました。

ア 絵の様子を文章に表す際、児童に普段使用する言葉で表現させました。

イ ワークシートを使って、絵に関して自分が思いつく言葉を書いた後、友達の考えを書き足すことができるようにしました。

ウ グループで活動する時間を設定し、似た意味の言葉を交流するようになりました。

② 児童の変容

児童の日常生活に即した絵を用いることで、その絵が表す言葉を複数考えることができ、グループの交流により、たくさんの似た意味の言葉に触れることができました。

「ことばのたつじん その3」のイラストをワークシートで活用しています。→



かずとかたち・かんがえるたつじん その1

【調査からわかること】

- 数についての基本的な概念（自然数、小数、分数など）の理解について
- 相対的なスケールを理解し、それぞれの数をスケール上で位置づけることができた上での、数の大小の理解について



- ① これらの問題ができない場合、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・自然数について、量感をもって捉えていないと考えられる。
 - ・自然数の概念はあっても、小数や分数の概念がないと考えられる。
 - ・実際の大きさを抽象的に捉えることができない。
 - ・視点を状況に応じて変換する、相対的なものの見方をすることが苦手である。
 - ・空間認知に課題があったり、スケールの意味理解が十分でないと考えられる。 等
- ② 今後の学習等において、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・算数科の「A 数と計算」に関わる問題全般につまずきが考えられる。
 - ・大きさ比で、2桁以上になったときにつまずきが考えられる。
 - ・ひき算の繰り下がりや余りのある計算、小数、分数などにつまずきが考えられる。
 - ・問題を図（特にテープ図、数直線等。）で表す活動につまずきが考えられる。また、式にはできるが図にはできないことが考えられる。
 - ・定規の活用等、作図が正しくできないことが考えられる。
 - ・分数の学習において、分母の大小と分数の大小との関係を理解できない可能性がある。
 - ・基本的な計算ができなかったり、計算したものを見直しても間違いに気がつきにくかったりすることが考えられる。
 - ・抽象的なものの大きさを捉えることができない。
 - ・ピーカー等の目盛りを読むことや、分量を正しく入れることにつまずきが考えられる。
 - ・温度や気温に関する問題につまずきが考えられる。
 - ・資料の読み取りにつまずきが考えられる。
 - ・家庭科の調理器具を使えない可能性がある。
 - ・走り幅跳び等において、目盛りが読めない可能性がある（距離感がつかめない等）。
 - ・日常生活の中で、数えたり分配したりすることができない可能性がある。また、組み合わせで一定の大きさや数値に近付ける活動ができない可能性がある。
 - ・実物を拡大して示したり、他の具体物に変えて捉えたりすることができない。 等

③ ②のつまずきに対して、どのような手立てが考えられるでしょうか。

- ・実物等を使い、数の大小を確認させる。
- ・大きなものを一つの単位として、いくつかに分け自然数より小さな数の存在に気付かせる。
- ・日常生活の中から、小数や分数の存在や意義を学ばせる（靴のサイズ、体温等）。
- ・調理実習の際、人数に応じた材料を計算したり、切り分けたりする場面を設定する。
- ・量感については、まず、半分の感覚を養う。例えば、数直線で全体が100の場合、100の半分は50、50の半分は25だから、18は…。
- ・マラソンで走っている途中、おおよそどの位置を走っているかなど、特定の数値が全体の中でどこに位置するのか具体的な場面を基に考える。
- ・観察や実験結果を、分かりやすく図で表す。
- ・視覚的支援（デジタル機器、具体物、挿絵、色分け等）をする。
- ・操作活動を行う（例 定規の活用、リボン等の具体物を用いての長さ比べ）。
- ・体験的な活動や遊びを通して学ばせる。

例 体育の体づくり運動、ボール運動、お店屋さんごっこ、買い物ごっこ、数遊び、トランプ遊び、身長比べ等

- ・日常生活における取組（学級活動、教室掲示等）



具体で理解しても、モノから離れて抽象的に分数を理解したり、分数と小数の関係を理解したりするのはとても難しいことです。時間をかけて、児童が納得するまで分数の「意味」を探究させる時間を取ることも大切です。

指定校の実践事例

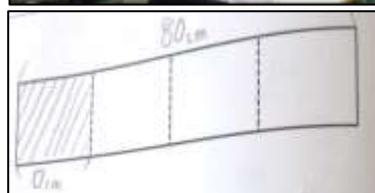
図や文章から読み解く問題などを理解することが難しい児童への取組（第3学年）

① 算数科「大きい数の割り算」の学習において、次のような手立てを行いました。

- ア 「4等分の1つ分」と「 $1/4$ 」をつなげるための紙テープの具体的操作
- イ 問題場面と学習のまとめにおいて、理解を定着させるためのデジタル機器の活用
- ウ 求める部分を明確にするための、数値や斜線を書き込ませるテープ図の活用
- エ 問題解決への見通しをもつことができるための、手順を示したヒントカードの活用
- オ 自分の考えを確かめ、他者との相違点や共通点に気付くためのグループトーク

② 児童の変容

- ・紙テープの具体的操作や、テープ図への書き込み、グループトークなどに意欲的に参加し、積極的に自分の考えを伝えようとしていました。
- ・本時の適用題において、正しく立式することができました。また、単元末テストの結果からも、本単元の学習内容をおおむね定着することができていました。

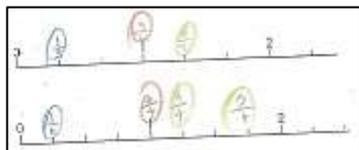


指定校の実践事例

形式的に分数を読んだり書いたりできているが、量感や意味を伴って理解できていない児童への取組（第4学年）

① 算数科「分数」の学習において、次のような手立てを行いました。

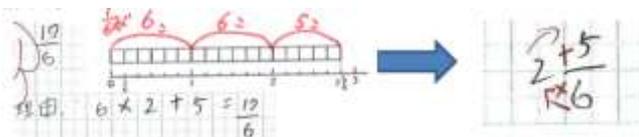
ア ピザの挿絵を実際に半分に分けたり、 $1/4$ に分けたりして、分母は「1を〇つに分けたか」であり、実際の量ではないこと、分子は「そのうちの△つ分」と実際の量であることを捉えさせました。



数直線を使って、教師の指示した分数を表す練習をしました。
 $4/3$ の場合
 ①分母が3なので、上の数直線を使います。
 ②分子が4なので、4目盛り進みます。
 という手順で分数を表したり、理由を説明させたりすることで、分母と分子の意味の定着を図りました。

イ 同じピザの挿絵を使い、 $1/2$ と同じ大きさにするには、 $1/4$ が2つ必要であることを考えさせ、表し方が違っていても大きさは等しい分数であることを確認します。

ウ 帯分数⇔仮分数の変換を、まずは数直線を使って確認した後、下のように印を付けて手順に沿って換算します。



② 児童の変容

同じ量でも様々な表し方があることを理解し、真分数、仮分数、帯分数を見分け、正確に分数で表すことができるようになりました。また、帯分数や整数を分数で表す方法が理解でき、きちんと換算して計算することができるようになりました。

指定校の実践事例

文章問題で、場面や数値の意味をイメージできない児童への取組（第3学年）

① 算数科「あまりのあるわり算」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア 予習でオリジナル算数キャラクター「もんきちくん」の誤答を示し、間違いの原因や正答について、もんきちくんと一緒に考えられるワークシートに取り組みせました。

イ 児童なりに「あまりのことをどうする問題か」を表現した記述を付箋シートにし、どちらの問題のことかを分類しながら考えさせる活動を仕組みました。

ウ 問題文でたずねられていることを正しくつかませるため、たずねられていることに下線を引くとともに、答えに付ける単位を○で囲ませます。



② 児童の変容

予習で「もんきちくん」の間違いの謎解きに取り組みせたことで、どの児童も問題場面を理解した状態で授業に入ることができました。そのため、「あまりのことをどうする問題なのか」について焦点化して思考・判断・表現することができました。また、問題文を正しく読むことにより、答え方に気を付けることができるようになりました。

指定校の実践事例

問題文の言葉の意味や情景をイメージしにくい、分数の量感をイメージしにくい児童への取組（第3学年）

① 算数科「分数」の学習において、次のような手立てを行いました。

【課題解決の見通し】

- ア ジュースの実物を提示することで、視覚的に興味をもたせ、学習意欲を高めました。
- イ ビデオで誤答を提示することで、誤答の理由を考えようとする意欲をもたせました。

【デジタル機器の活用】

- ア 自分の考えたやり方を、タブレットを使い図や言葉でまとめさせました。
- イ 自分の考えたやり方を、電子黒板で発表させたり、ペアトークで説明し合わせたりすることで、理解を深めさせました。

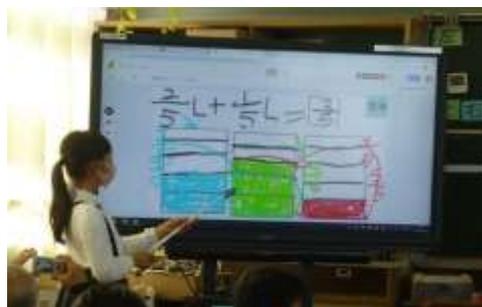
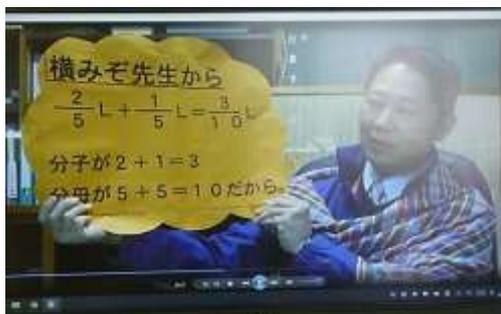
【量感をイメージさせる具体物】

- ア 最後に $3/5$ Lのジュースを実際に注いで $3/10$ Lのジュースと比べ、量の違いを実感させました。



② 児童の変容

- ・ 誤答を最初に提示し、「 $3/10$ Lではなぜいけないのか？」というめあてを設定することが考えるきっかけとなり、「解いてみよう」という意欲をもつことができました。
- ・ ペアトークで説明し合うことで、問題の読み取りや自分の解き方について理解を深め、自信をもつことができました。



指定校の実践事例

小数の概念の理解が難しい児童への取組（第3学年）

① 算数科「小数」の学習において、次のような手立てを行いました。

- ア 単元のはじめに、「0.1のいくつ分」の考え方を理解させるため、小数の構成についてデジタル機器を活用して指導しました。
- イ 学習した内容について理解を図るため、分かったことなどを交流する場を設定しました。



② 児童の変容

デジタル機器を効果的に活用することで、「0.1のいくつ分か」を捉えやすくなり、小数の構成についても理解を深めました。また、友達と交流をする中で理解が深まり、振り返りでは、「算数が好きになってきた。」という記述がみられました。

指定校の実践事例

数の意味を表す言葉や変化のイメージ化につまずきが予想される児童への取組（第2学年）

- ① 「広島県学びの基盤に関する調査」の結果から、語彙の問題や同時に3つの次元の処理を行うことに課題が見られました。算数科「かけ算」の学習において、「1つ分」と「いくつ分」のように、数の意味を表す言葉や数の変化のイメージ化につまずくと予測されたため、次のような手立てを行いました。

ア かけ算の意味理解の手立て

絵を色分けすることで、「1つ分」と「いくつ分」を視覚的に理解させました。

イ 文章題での手立て

文章の中から「1つ分」を表す言葉（「~ずつ」や「1つの~に」など）を見付けさせ、次にその「いくつ分」を見付けさせました（アと同じ色分けをして立式）。

ウ 授業外での手立て

放課後学習教室における学習時にも、色分けを徹底するなどして、学年全体の児童に対して意味理解の定着を図りました。

- ② 児童の変容

対象の児童は、学習に自信をもって取り組めるようになりました。苦手だった文章題も、自分で「1つ分」「いくつ分」を見付けて色分けしながら、立式することができました。また、かけ算とたし算の複合問題でも、立式のヒントとなる言葉を自分で見付けて自信をもって解くことができました。

指定校の実践事例

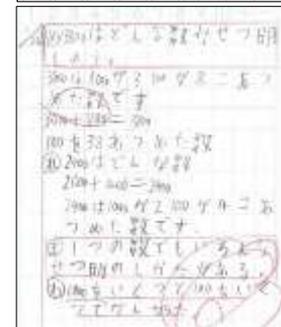
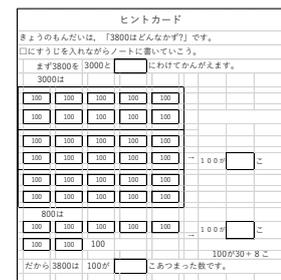
問題把握が難しい児童への取組（第2学年）

- ① 算数科「1000より大きい数を調べよう」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア 問題をイメージしやすいように、実物や具体物を用意しました（視覚的サポート）。

イ 問題やめあてを書く場面や振り返り（まとめや分かったこと）を書く場面で、簡単な言葉を使って説明したりサポートしたりしました。

ウ ヒントカードを与え、自力解決のサポートをし、ノートに自分の考えを書くことができましたようにしました。



- ② 児童の変容

視覚的サポートにより、短時間で問題の意味を掴むことができるようになるとともに、簡単な言葉を用いた補足説明により、自分で考えようとする姿が見られるようになりました。思考場面で肯定的な声掛けを心掛けることで、ノートに考えたことを書くことができるようになりました。本時の適用題にもしっかりと取り組み、振り返りも書くことができるようになりました。

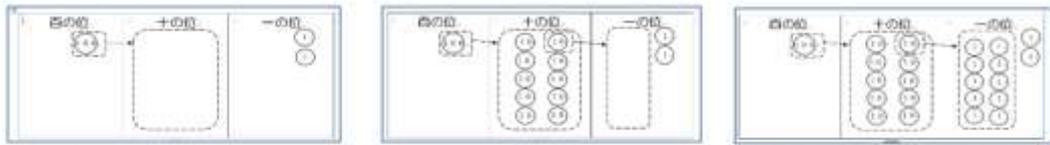
指定校の実践事例

問題場面を正しく把握し、図で表したり、立式して計算したりすることが難しい児童への取組（第2学年）

① 算数科「たし算とひき算のひっ算」において、次のような手立てを行いました。

ア 個別の指導計画に基づく自力解決のためのヒントカードの活用【焦点化】

計算の仕方を図に表すために、段階的なヒントカードを作成しました。そして、児童の理解の状況に応じてヒントカードを配付し、「下の位に1繰り下げると、いくつのまとまりが何個できるか」を容易に考えられるようにしました。



【ヒントカード（段階1）】

【ヒントカード（段階2）】

【ヒントカード（段階3）】

イ 児童の理解を促すためのICT活用【視覚化】

問題場面を的確に把握させるために、場面の様子等を電子黒板で提示し、視覚的に支援しました。また、計算の仕方と筆算の書き方がつながるように、百の位から波及的に繰り下がる図の様子をパワーポイントで示し、理解が深まるようにしました。

ウ 赤と青のマグネットカードの活用による、自分の理解度の意思表示【共有化】

青のカード（友だちに教えられる）、赤のカード（友だちに教えてほしい）で現在の理解度を示すことにより、相手意識をもった交流活動ができ、教師がその状況を基に、細やかな個別支援を行うことができるようにしました。

② 児童の変容

問題把握でICTを活用したことにより、視覚的に理解を助け、正しく場面を把握することができるようになりました。また、計算の仕方を図に表す過程では、段階に応じたヒントカードを活用することで、繰り下がり計算の意味が理解できるようになりました。交流活動を意図的に位置付け、相手の理解度に応じて互いに説明したり、聞いたりすることにより、筆算の仕方の理解を確かなものにすることができるようになりました。

指定校の実践事例

数字の表記、数と量の一致、順序性、数の分解・合成の理解が難しい児童への取組（第1学年）

① 算数科の学習において、次のような手立てを行いました。

ア 算数ノート上部の数字を毎時間なぞらせ、数字の表記に慣れさせました。

イ 毎時間、算数の授業の前に、ペアで10の補数のカードゲームを行いました。

ウ 常に具体物（ブロック）を使って、たし算・ひき算に慣れさせました。

エ ICTを活用し、視覚的に学習の支援を行いました（例 電子黒板にノートを提示）。

② 児童の変容

数字が読め、書き順も正しく書くことができるようになり、10の補数はゲームを通して定着させることができました。「たしざんひきざん」の単元では、○図を書き、必要な数字を正しく書き入れることができるようになりました。

- ① 「広島県学びの基盤に関する調査」の結果から、数直線を見て、0～100の間に数が並んでいるというイメージをもつことが難しいというつまずきが分かりました。

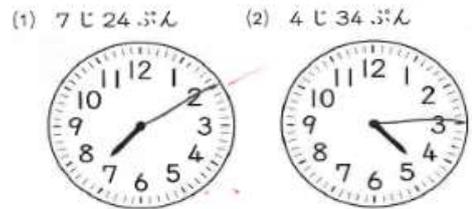
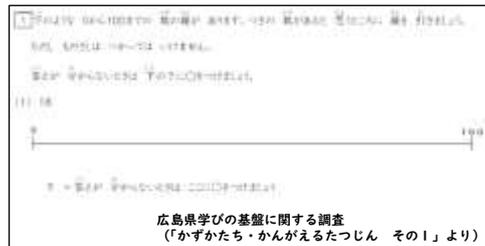
算数科「時計」の学習において、時計の小さな目盛りが読みにくい(*)というつまずきに対して、次のような手立てを行いました。

ア ボールをパスしながら数を数えるゲーム

- ・ 1～100まで
- ・ 2、4、6…
- ・ 5、10、15…
- ・ 100～1まで など

イ 引いたカードを虫食いの状態で並べ、完成させるゲーム（写真1）

ウ 何がなくなったか見付けるゲーム（写真2）



※児童の誤答の様子
長針が小さな目盛りを指す際、数（分）が1ずつ大きくなることを理解しにくい。



写真1



写真2

- ② 児童の変容

ゲームを通じて学ばせることにより、児童は時計の小さな目盛りを正しく読めるようになりました。小さな目盛りが1ずつ大きくなっていくこと、大きな目盛りは5ずつ大きくなっていくことを理解することができました。

かずとかたち・かんがえるたつじん その2

【調査からわかること】

○形を自分の心の中で操作し、見えない部分の補完や、回転後の形の見え方などをイメージすることができるかについて



- ① これらの問題ができない場合、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
 - ・頭の中で図形操作ができない、イメージができないなどの可能性がある。
 - ・図の一部を操作すると、どこが移動し、どこが残るか、イメージすることが難しい。
 - ・見える部分から見えない部分を推測することが難しい。
 - ・どの程度回転すると、図形を構成する辺や角などの位置がどこに移動するのか、イメージすることが難しい。 等
- ② 今後の学習等において、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
 - ・線対称、点対称の学習や、図形の合同（または相似）の学習において、理解が難しいことが考えられる。
 - ・図形（空間図形を含む）について、実感をもって捉えることができにくい。
 - ・図形に補助線を引いて考えることができない可能性がある。
 - ・見通しをもち、状況に応じて物をつくったり、デザインしたりできない可能性がある。
 - ・複合図形の面積を求めることが難しい。 等
- ③ ②のつまずきに対して、どのような手立てが考えられるでしょうか。
 - ・説明書を見ながら折り紙を折ったり、逆に作り方の説明書を書いたりする。
 - ・積み木等を使って作品を作ったり、友達と協働して一つの作品を作ったりする。
 - ・遊びの中でイメージができるようにする（パズル、図形の神経衰弱ゲーム、タイル等を敷き詰めるゲーム）。 等

指定校の実践事例

図形と積み木の形が結びつかない児童への取組（第1学年）

- ① 算数科「かたちづくり」の学習において、次のような手立てを行いました。

- ア 児童の色板にぴったりあう絵を配付し、ぴったりと合う並べ方を考えさせました。
- イ 1つ目の影絵だけ方眼の線を引いておき、色板を並べるヒントになるようにしました。
- ウ ペアで色板を見合って、気づきを交流させました。



- ② 児童の変容

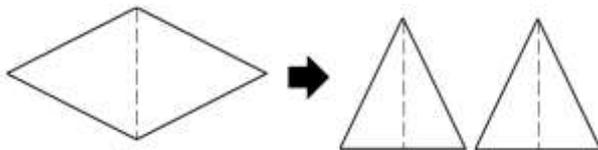
ヨットの帆先の部分や船体の先の部分等、つまずきやすい部分でも色板を回しながらぴったり合う並べ方を見付けることができました。また、繰り返すことで、色板2枚を並べ、三角形や四角形を作る時間が短くなっていました。

指定校の実践事例

面積を求めるための必要な長さがどこかを理解することが難しい児童への取組（第5学年）

① 算数科「面積」の学習において、いろいろな図形の面積を求めることができることを目指し、次のような手立てを行いました。

ア 【視覚化・操作活動】図形を配付し、紙を切ったり書き込ませたりして既習の図形に変形させました。



色紙などで作成した図形を、毎時間切ったり動かしたりして既習の図形を作りました。操作をさせることで、面積を求めるための必要な長さを考えることにつながりました。



イ 【視覚化・焦点化】底辺と高さを色分けして示し、児童の図形にも書き込ませました。底辺と高さが垂直になっているか、三角定規を当てて確かめさせてから、直角の印を書き込ませました。



② 児童の変容

面積を求めるための必要な長さを測ることができました。底辺から高さが垂直になっているかどうかを三角定規で確かめることで、どこが高さなのかを考えることができました。

指定校の実践事例

垂直・平行の定義について理解が不十分で、一組の三角定規を使って、垂直・平行な直線をかくことが難しい児童への取組（第4学年）

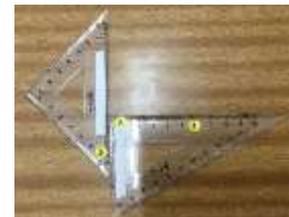
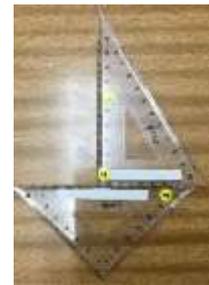
① 算数科「垂直・平行と四角形」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア デジタル機器を活用し、お手本の動画を見せることで、垂直・平行な直線をかくための見通しをもたせました。

イ どの定規をどのように合わせたらいいか分かりにくい時は、合わせるところに手順の番号が書かれたシールを貼らせました。

ウ 垂直・平行な直線をかく手順が示されたワークシートを用意することで、自力解決の際の手立てとしました。

エ ペア学習でやり方を説明させることで、それぞれのかき方の定着を図りました。



② 児童の変容

デジタル機器を活用することで、視覚的に垂直や平行のかき方を捉えることができ、自力で問題を解決することができました。ペアで三角定規の動かし方を説明し合うことで、相手に伝わりやすく説明しようとする態度が見られました。

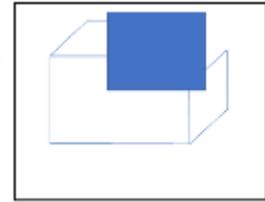
指定校の実践事例

情報を正しく読み取ったり、友達の考えを聞いて、図形をイメージしたりすることが難しい児童への取組（第5学年）

① 算数科「直方体や立方体の体積」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア デジタル機器を活用した問題提示

着目させたいポイントを明確にしました。分け方の説明をしやすくするために、導入時の図形には、数値を入れずに提示しました。



イ 課題と同じ立体の模型を使って説明

複合図形の分け方をイメージしやすいように、問題と同じ立体模型を使って分け方を説明しました。



ウ 体積の「求め方」のみに絞った説明

どのように分けたのかをナンバリングすることや、分けた図形に名前を付けることを指導し、簡潔に説明ができるようにしました。

問題提示の際、数値を入れずに提示することで、分け方のみに着目することができ、児童は自分の考えをもつことができました。



② 児童の変容

実際に立体模型を手にとって操作させることで、どのように分けたら良いかイメージできていました。また、説明する時にも実際の立体模型を使うことで、どのように考えたのかを分かりやすく説明することができました。

指定校の実践事例

図形を見分けることが難しい、また面積を求めることが難しい児童への取組（第6学年）

① 算数科「およその面積と体積」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア 単元構想の工夫

本単元では、他教科の既習事項や身近なものに関連付けさせることで、興味をもって問題に取り組ませました。

イ 自分で選択させる場の設定

本単元では、児童自身が問題となる絵や写真を見て、どのような図形に見えたかが大切になります。そのため、あらかじめ教師が児童の考えを推測して、長さをかいたワークシートを複数用意しました。



ウ 教師による誤答の活用

児童とやりとりをする中で、「より正確に面積を求めるためには、最も似ている形を選択する必要がある。」という本質に迫りました。

② 児童の変容

自分で選択する場を設定することで、興味をもって学習に取り組み、分からないことは積極的に質問をする姿がありました。概形を捉えることができるようになり、必要な辺の長さがどこなのかを見付けることができるようになってきました。

指定校の実践事例

180度を超える角度を求めることが難しい児童への取組(第4学年)

- ① 算数科「角の大きさの表し方を調べよう」の学習において、次のような手立てを行いました。

【角の大きさとどこを表しているものかを理解します。】

ア 2つの角を比べさせ、辺と辺の間につくられた角に着目させました。

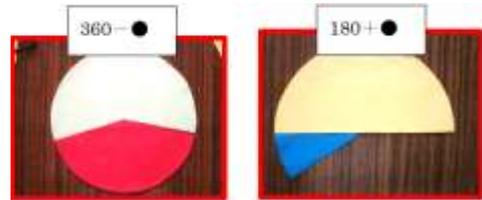
イ 角の大きさを比べる活動を行うことで、角の大きさについて理解させました。

【180度を超える角の大きさを測れるようにします。】

ア 180度と360度は、分度器で測らなくても分かることに気付かせました。

イ 180度を基に考えるときは、180度とあといくつかを考えさせました。

ウ 360度を基に考えるときは、求めたい角度の反対側の角度に着目させ、360度から測った角度を引くことで求めさせました。



- ② 児童の変容

角の大きさを比べる活動を行ったことで、角の大きさはどこかを理解することができました。また、180度を超えた角度を求める時には、「180+●」や「360-●」を使って求めることができるようになりました。

色画用紙を使って角度を表すことで、全ての児童にも視覚的支援を行うことができました。特に、180度を超える角度を求める際には効果的であり、どこを測ればいいのか、求めたい角度はどこなのかが見やすくなったため、立式もしやすく児童の理解も高まりました。



指定校の実践事例

複合図形の面積を求めることが難しい児童への取組(第4学年)

- ① 算数科「面積」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア 広さを比べる学習では、周りの長さと同面積(広さ)が混同しないように、ストロー等の具体物を用いながら、面積に着目させるようにしました。

イ デジタル機器を効果的に活用しました(図形の色分け、アニメーション等)。

ウ 「1cm²がいくつ分」の広さを具体的にイメージさせるために、1cm²マスのカードを操作したり、マス目の入ったワークシートに実際に図形をかかせたりしました。

エ 図形に「たて」「横」などの公式の根拠となる部分を色分けしたり、動作化したりさせました。

オ 面積を求める問題では、分けて考える時にそれぞれの図形にア・イなどの記号を使って書き込ませ、式につなげて考えさせました。



- ② 児童の変容

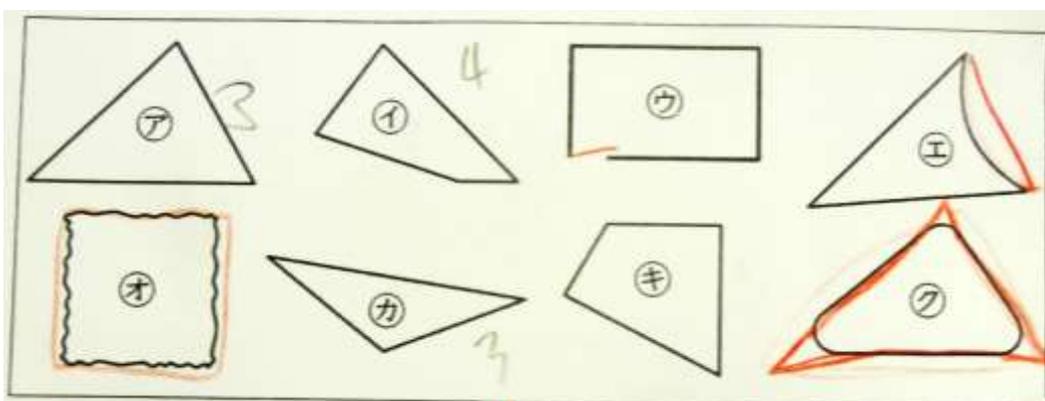
デジタル機器を活用することで、複合図形のどの部分について考えると面積が求められるかをイメージすることができ、練習問題に取り組むうちに、自力解決ができるようになりました。

① 「広島県学びの基盤に関する調査」の結果、対象児童は「かずとかたち・かんがえるたつじん2」に課題が多く見られました。特に、折り紙の展開図、図形回転類推の問題でつまづいていることが分かりました。問題の意味を理解することや、図形のどこに着目して見るのかということに対して支援・手立てが必要であると考え、次のような手立てを行いました。

ア ゲーム感覚の導入で活動に興味をもたせました。

第1時に行った三角形や四角形を並べてパズルを完成させる活動に意欲的に取り組むことができたため、別の時間でもゲーム要素のある導入で活動に興味をもたせるようにしました。

イ 図形の気になる点を書き込ませ、それを自分の言葉で書かせました。

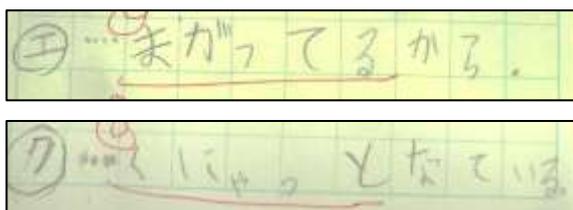


「文章でなくてもよい。」とすることで、キーワードだけでも自分なりに書けるようにしました。

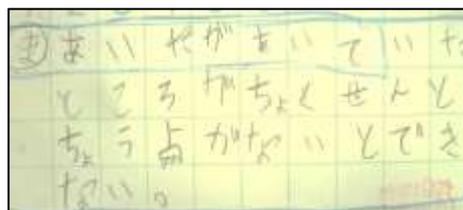
ウ 児童から出てきたキーワードと定義を関連付け、三角形と四角形を弁別する要素「直線」「囲まれている」に着目させました。

② 児童の変容

いつもは誰かに声をかけられないと活動に参加できなかった対象児童が、自分の言葉で理由まで書くことができました。また、レディネステストでは、三角形と四角形を反対に分類していましたが、直線の本数をもとに正しく図形の分類ができるようになりました。さらに、三角形や四角形ではない図形の弁別では、「まがっている」「くにやっと」等の言葉で説明していた児童が、まとめでは「直線」「ちょう点」という用語を使ってまとめを記述することができました。



対象児童の弁別した理由の例



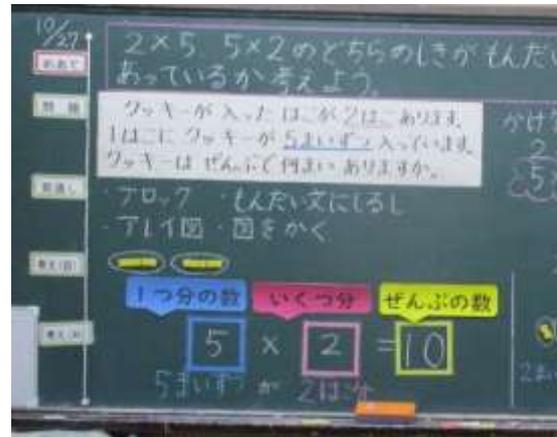
対象児童のまとめ

指定校の実践事例

問題場面を正しく把握し、見通しをもったり式を立てたりすることが難しい児童への取組（第2学年）

① 算数科「かけ算」の学習において、次のような手立てを行いました。

- ア 問題文の「1つ分」や「いくつ分」に当たる数を見付け、色分け表示（右写真）をし、視覚化を図ることで、数量の関係に着目できるようにしました。
- イ 図がかけない児童には、問題文に合わせて数図ブロックを操作させました。
- ウ 実物を操作させることで、問題の意味理解を確実にさせました。



② 児童の変容

「1つ分」「いくつ分」にあたる数を毎時間、同じ色で分けて表示することで、数量の関係を意識付けることができました。その結果、問題の処理をスムーズに行うことに繋がりました。また、問題文を読んで図に表すことができなかった児童も、数図ブロックの操作を繰り返すことで、具体物がなくても正しく図をかくことができるようになりました。

指定校の実践事例

図形の操作や補完、回転後の形の見え方などをイメージすることが難しい児童への取組（第2学年）

① 「広島県学びの基盤に関する調査」の図形に関する問題の正答率が低いことを踏まえ、算数科「三角形と四角形」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア ICT機器を活用した視聴覚支援

囲まれている図形の特徴について、アニメーションを活用して説明したり、三角形と四角形の分類をしたりしました。

イ 図形を焦点化

向かい合う辺に色を付けたり、直角の部分に印をしたりしました。

ウ 具体物の操作

不定形の紙や折り紙から、長方形や直角等を実際に作る活動を通して、図形の構成要素の用語やその意味の理解を深めました。

エ 日常生活の事物と関連

直角三角形等の定義を理解した後、身の回りで使われている図形の写真を撮り、説明する活動を取り入れました。



② 児童の変容

児童は、正しく図形を弁別することができるようになり、辺や頂点に着目しながら、1つの四角形から「2つの三角形」「三角形と四角形」「2つの四角形」ができることを説明することができるようになりました。

かずとかたち・かんがえるたつじん その3

【調査からわかること】

- 与えられた材料から演繹したり類推したりする推論の力について
- 複数の次元に同時に着目しながら心の中で並行して操作を行い、それを統合して類推を行う力について
- 情報処理能力、実行機能を使って、求められた問題に必要な情報を記憶から探し、関係のない情報への注目を抑制する力について

- ① これらの問題ができない場合、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・一つ一つの状況を判断し、統合して類推することができにくい。
 - ・複数の情報を同時に考えることが難しい。
 - ・場面絵の状況を理解できていない。
 - ・比較する視点が定まらない（どこに着目したらよいか、どこから考えたらよいか等）。
 - ・記憶することやイメージすることに困難さがあると考えられる。
 - ・全体ではなく、部分に分けてどこが同じでどこが違うのか見出すことが難しい。
 - ・問題文の意味が理解できない。文章や問題文の読み取りが不十分である。
 - ・その問題が何を求めているのかをつかむ力が弱い。
 - ・思い込みで問題を解いている。
 - ・関係性を記憶して、その関係性を他の場面にあてはめることが難しい。 等
- ② 今後の学習等において、どのようなつまずきが考えられるでしょうか。
- ・表やグラフから情報を読み取ることができない可能性がある。
 - ・複数の情報から類推することや情報を抽出することに難しさを感じやすい。
 - ・自分の解答を振り返り、修正することができない可能性がある。
 - ・問題文にある指示を正しく読めず、理解ができない可能性がある。
 - ・思い込みで問題を解いてしまいやすい。
 - ・想像したりイメージしたりすることが難しく、学力が伸びにくい。学習全般につまずきやすい。
 - ・物事を文脈で捉えることができにくい。 等
- ③ ②のつまずきに対して、どのような手立てが考えられるでしょうか。
- ・着目する箇所に印を付けたり、着目する順序を示したりする。色で分類する。
 - ・遊び等で実感を伴って学ぶ機会を増やす（五感を使って遊ぶ等）。
 - ・観察をする際、全体だけでなく、部分を細かく見て、共通点・相違点を見出させる。
 - ・普段から人の話を注意深く聞く習慣を身に付けさせる。
 - ・短期記憶を鍛える。難しいようであれば、最初はメモを取らせる。
 - ・板書や紙面上の情報量を減らし、少ない情報の中で関連付ける練習を行う。
 - ・友達と話しながら学ぶ機会を増やす（友達からの気付きで学ぶ等）。
 - ・絵本や本を読み、知っている世界を広げる。 等

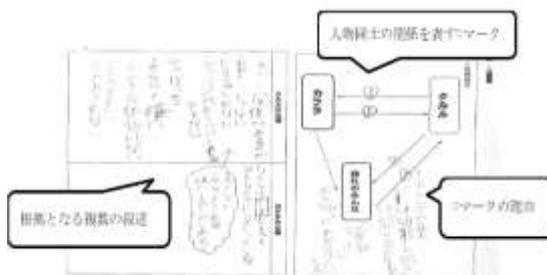
指定校の実践事例

登場人物の関係が捉えられなかったり、理解が不十分なため、考える意欲がもてなかったりする児童への取組（第6学年）

- ① 国語科「風切るつばさ」の学習において、人物の心情の変化を読み取り、人物同士の関係を捉えることを目指し、次のような手立てを行いました。
 - ア 事前に音読をさせました。その際、漢字の読み仮名を書かせたり、暗示的に表現されている言葉に着目させたりしておきました。
 - イ 人物同士の関係に♡マークを用いて図化して、人物同士の関係を捉えさせました。
 - ウ 人物同士の関係の変化が比較できるように、場面ごとに画用紙1枚にワークシートを貼らせ、場面の移り変わりと結び付けて心情の変化を捉えさせました。
 - エ 登場人物の気持ちがどこで大きく変化したのかを読み取らせるため、会話文の続きを考えさせたり、話を一文でまとめさせたりしました。

② 児童の変容

- ・ 図で表すことで、人物同士の関係をイメージすることができました。さらに理由を書き込むことで、それを支える根拠として、複数の叙述に注目するようになりました。
- ・ 画用紙にワークシートを貼り、それぞれの場面での人物の心情を比較することで、人物同士の関係を読み取ることができました。また、最後にどのような話だったかを一文でまとめさせることで、心情の変化の因果関係に気付けるようになりました。

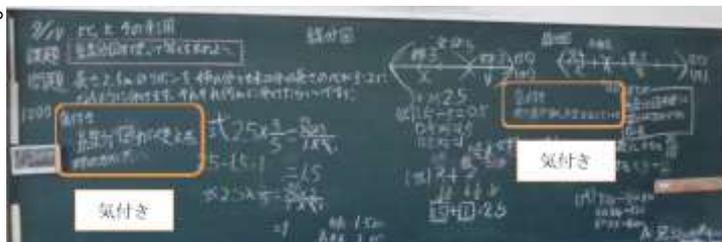


指定校の実践事例

文章を図にしたり、式に表したりすることが難しい児童への取組

(第6学年)

- ① 算数科「比とその利用」の学習で、次のような手立てを行いました。
 - ア 第1時において、比を線分図で表す方法を指導し、定着できない部分は、放課後補充で個別に指導しました。
 - イ 問題文を1文ずつ確認して線分図に表すようにさせ、文章から線分図に表せるよう、繰り返し学習しました。
 - ウ 気付きの交流において、解決方法や答えの見通しをもたせるようにしました。



② 児童の変容

- ・ 線分図をかく練習を繰り返したことで、題意に合う線分図を正しくかけるようになり、数量関係を正しく理解し、比の1つ分を求める方法で解くことができました。
- ・ グループの話し合いでは、線分図と式を対応させて説明することができました。

指定校の実践事例

情報の整理ができない児童への取組（第6学年）

- ① 国語科「家族に役立つ防災ポスターを作ろう」の学習で、自分の考えが伝わるように書き表し方を工夫することを目指し、次のような手立てを行いました。
- ア ゴールイメージを具体的にもたせ、相手意識の明確化を図りました。
 - イ 大切な箇所に線を引いたり、根拠となる図表やグラフなどを選択したりする方法を具体的に指導し、黒板に掲示しておきました。
 - ウ 「良くないポスターの例」を掲示し、引用の仕方や図表やグラフを活用した文章の書き表し方などに児童が着目できるようにしました。

② 児童の変容

- ・相手意識を明確にすることで、どの情報を使うと伝わるかを考えながら情報を選択しようとすることができました。
- ・「良くないポスターの例」を提示し、問題点を考えさせたことで、児童は資料の活用の仕方が具体的にイメージでき、選んだ資料を使って自分なりにまとめることができました。



資料を効果的に活用できているかを見直す

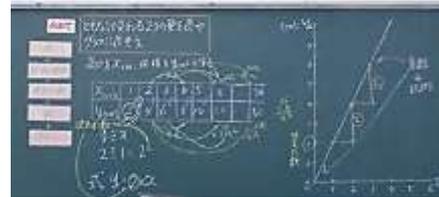
指定校の実践事例

伴って変わる2つの量の関係を、式に表すことができない児童への取組（第6学年）

- ① 算数科「比例と反比例（表を使って考えよう）」の学習で、次のような手立てを行いました。

- ア 伴って変わる2つの量の関係を表に表す際の手順を明確にし、縦と横で色分けをして、見付けたきまりを表に書き込ませました。
- イ 比例の指導の際に、①表、②比例関係、③きまった数、④式、⑤グラフ、とスモールステップにした手順をスクリプトで提示し、単元を通して使うことで考え方の定着を図りました。
- ウ 比例と反比例を理解させるため、スクリプトを繰り返し使用したり比例と比較したりすることで、より理解を深めました。

- ①表を横に見る（緑でかく）。
- ②表を縦に見る（青でかく）。
- ③決まった数（縦に入るもの）



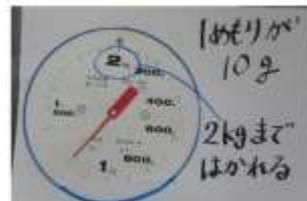
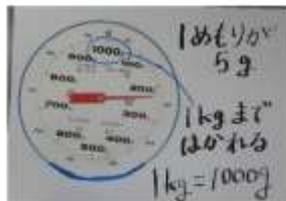
② 児童の変容

- ・表の見方を理解し定着を図ったため、挿絵がなくても問題に応じて表に正確な数がかかるようになりました。
- ・表の見方を理解したため、きまりを式で表せるようになり、問われていることにも正確に演算決定をして答えることができていました。
- ・比例と反比例をよく理解しており、文章だけで判断が難しい場合は、表をかいて確かめていました。また、スクリプトを使って思考の手順を示す手立てが定着していました。

指定校の実践事例

はかりの目盛りを読み間違える児童への取組（第3学年）

- ① 算数科「重さのたんいとはかりかた」の学習で、次のような手立てを行いました。
 - ア 手作りの天秤やはかりを実際を使って、自分の身近にあるものを量りました。
 - イ はかりの目盛りをじっくり観察する時間を取りました。
 - ウ はかりを拡大した図（掲示物）を用意し、目盛りを読むときにどの数字をヒントにしたらいいか伝えました。



② 児童の変容

天秤やはかりの使い方を理解でき、はかりの目盛りを正しく読むことができるようになってきました。テストの問題を解くときには、はかりの目盛りに書き込みをして問題を解いていました。

指定校の実践事例

自分の考えを式・図・言葉等で記述ができない、また算数に対する苦手意識が高く、学習意欲の低い児童への取組（第5学年）

- ① 算数科「単位量あたりの大きさ」の学習で、次のような手立てを行いました。
 - ア 問題の「分かっていること」「求めること」「単位」を整理し、課題を発見させました。このことにより、問題文の中で着目すべき箇所が明確になりました。
 - イ 「考え方」の見通しを出させました。

本単元では、「1枚当たりの値段方式」や「1円当たりの枚数方式」などです。考え方の見通しを立てることで、「～方式なら、～のような式になるのではないかな。図は～だな。」というように、解決方法が具体的にイメージできました。
 - ウ 自分の考えを「式・図・言葉」で記述させました。
 - エ 「巻き込み発問」「ラベリング」で、全員参加で問題を解決させました。

集団解決の際には、前に出た児童が次々と質問し、全員で問題に取り組むように指導しました（巻き込み発問）。さらに、考えを出し合った後、二つの考えを「ラベリング」させました。そうすることで、相違点を明確にし、見通しの妥当性についても検証できました。
 - オ 自分の力で「まとめ」「練習問題」「振り返り」を書いたり、解いたりできるようにしました。

② 児童の変容

学習に消極的であった児童も、4月から同じスタイルで取り組んできたことにより、ノートに自分の考えを書いたり、発表したりするなど、自信をもって授業に取り組むようになりました。分からないことに対しても、児童は「何とかしたい。」という意欲をもって、友達の発表を聞いたり、質問したりできるようになりました。

- ① 国語科「お手紙」の学習において、複数ある情報を整理させるため、次のような手立てを行いました。
- ア 問題文の中で大事な箇所に丸を付けたり、色分けをしたり、キーワードを提示したりしました。
- イ 情報を焦点化するための教具を使ったり、問題の内容を絵や図で表したりする活動を行いました。



【色分け、線や丸で囲む板書の工夫】

【情報を焦点化するための教具の工夫】

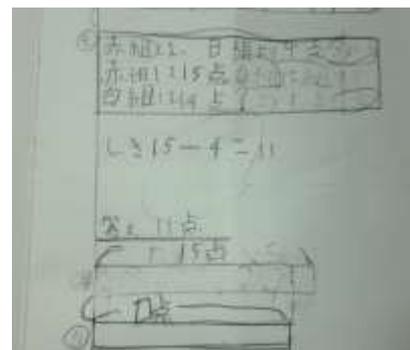
② 児童の変容

板書で問題文の大事な箇所に丸を付けたり、色分けしたりして情報の整理の仕方を示したことで、自分のノートにも同じように丸を付けたり、色を変えて線を引いたりするようになりました。このような取組を様々な授業で継続して行ったことで、自分からキーワードに線を引いたり、丸を付けたりして情報を整理することができるようになりました。具体物や教具を活用することで、情報が整理でき、落ち着いて授業に臨めるようになりました。

- ① 算数科「図を使って考えよう」の学習において、次のような手立てを行いました。
- ア 図を書くときや式を立てるとき、問題のどこがその図と対応するのかを確認しながら授業を進めました。
- イ 説明をするとき、図や問題文を指し示しながら説明させるようにしました。

② 児童の変容

問題文の大切な部分に、印を付けるようになりました。放課後の個別指導と連携をさせたことにより、「わかった。」「こうすればできるんだ。」と自分からノートに考えを書く姿が多く見られるようになりました。成功体験が自信につながり、学力も上がり、どの学習でも笑顔が見られるようになりました。



かけられる数とかける数を的確に捉えることが難しい児童への取組（第2学年）

① 「広島県学びの基盤に関する調査」の結果から、与えられた材料から演繹したり類推したりする「推論する力」が弱いことが分かりました。そこで、算数科「かけ算」の学習において、次のような手立てを行いました。

ア 「1つ分の数」と「いくつ分」の違いを明らかにするために、いずれの問題も図を用いました。また、具体物から右のような抽象的な図へと変える授業も行いました。



イ 「かけられる数」と「かける数」の関係を捉えさせるため、板書と掲示物の色を合わせて指導を行いました。また、文章を読み取る際、同じ色で印を付けさせる指導を行いました。

2	×	3	=	6
かけられる数		かける数		すべての数
(1つ分の数)		(いくつ分)		
↑青		↑赤		↑黄

ウ 聴覚からも学習喚起を行うため、毎時間「九九の歌」を用いて学習を行いました。

② 児童の変容

かける数が1増えるとかけられる数だけ答えが大きくなることを理解することができました。

当初、授業での振り返りの際、書く内容が思い浮かばないことが多く、書いた内容も学習で分かったことではなく、感想のみになっていることが多くありました。支援を行った結果、分かったことや日常生活での活用事項など、様々な事柄を思い起こすことができ、振り返りの記述にも変化が見られました。

お兄ちゃんかかけ算をし
ていた昇くしたいよと思
い直した。



さいじふや、た時は、り
からよか。たいどかけられ
る数が1、2、3、4、5、
6、7、8、9とふえて行くの
かめか。た、1つ分の数と
いくつ分のせんぶの数です。
同じ数かたたくせんのかれか
ている時のかえりです。

問題場面を理解して立式したり、自分の考えを説明したりすることが難しい児童への取組（第2学年）

- ① 算数科「たし算とひき算」の学習において、「数の分解が身に付いておらず一位数の繰り上がり・繰り下がり」の計算に時間がかかること、「文をまとまりで捉えることができず、問題場面を理解して立式したり、自分の考えを説明したりすることに困難さがあること」が分かり、次のような手立てを行いました。

ア 単元を学習する時期から、ドリルタイムを活用して、くり上がり・くり下がり」の計算プリントを反復して行いました。

イ 事柄の順序に沿って問題場面を把握することができるよう問題文を分割して提示しました。テープ図を描く際にも、問題場面の順序に沿って描くことを指導しました。

ウ 問題文の中から必要な情報を読み取るため、問題文に赤線を引く指導を行いました。

〔分かれていることは直線、求めることは波線、求めたい部分に口を書くよう指導〕

エ 図の「全体」を求めるのか「部分」を求めるのかを視覚的に捉えさせるために、テープ図の求めたい部分に斜線を引かせました。

オ ノートやワークシートには、「求めるのが(全体／部分)だから(たし算／ひき算)」と演算決定の理由を考えるための手助けとなるよう穴埋め式の手助けの言葉を示しており、児童が自分の考えを説明する際の補助となるようにしました。また、立式の理由を多様な言い方で説明させたり、動作化を用いた説明をさせたりすることで、多様な説明の仕方を身に付けることができるようにしました。

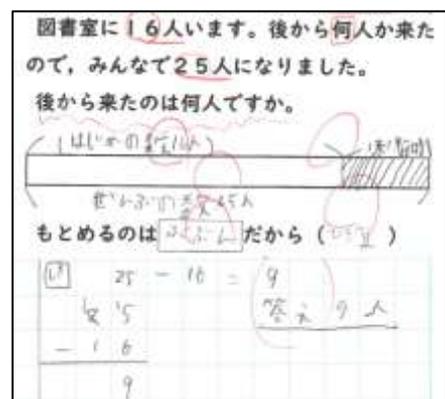


学校で作成した「広島県学びの基盤に関する調査」の結果分析資料

- ② 児童の変容

計算問題の反復をしたことにより、繰り上がり・繰り下がりのある計算問題を素早く解くことができるようになり、本単元での計算にも抵抗なく取り組むことができました。

問題場面を分割して提示することで、問題場面を正確に把握することができ、読み取った情報を基に正しくテープ図をかくことができるようになりました。演算決定をする時には、テープ図の斜線を手掛かりとして、求めるものがテープ図の「全体」か「部分」かを捉えることができました。演算決定の根拠を説明する場面では、自分の考えを友達に説明したり、全体場で発表したりする姿も見られました。



放課後補充学習等の実際



【東広島市立中黒瀬小学校】

- 全学年を対象に、「放課後ルンルン教室」という名前で、家庭と連携し迎えなどの承諾を受けた児童に対して、月・木・金の放課後、学習室で宿題を中心に学習の補充を行います。



分からない時には、手を挙げて指導者に教えてもらう等、児童が安心して取り組める体制をつくりました。

10の補数や四則計算等、個に応じた計算チャレンジプリントに取り組みせました。



学習の基礎となる内容を掲示したり、手作り教具を並べたりしました。



学習が終わったら、頑張ったごほうびとして個人カードにシールを貼りました。

- 児童の変容

家庭学習をする習慣が定着しにくい児童も、放課後ルンルン教室で宿題をすることで、「放課後ルンルン教室」がない日も忘れずに宿題ができるようになってきました。また、教室内で上級生が下級生に教えたりする姿も見られるようになり、児童が学び合う場所にもなってきました。

児童が自信を付け、授業で発表したり、学校生活で明るく友達と話したりする姿も見られるようになりました。

【廿日市市立阿品台東小学校】

- 放課後補充学習において、第1学年の児童に対して、「平仮名の定着」「数の概念の定着」を目指して指導を行いました。

- ・放課後補充は1対1で対応します。
- ・「ひらがなかるた」「カタカナかるた」をします。
- ・数字、カードゲームをします。
(10のまとまりを捉えます。)
- ・音読を一緒にします。(指導者がじっくり聞く。)



- 児童の変容

上記の手立てを繰り返し行うことで、平仮名と数字は正確に書けるようになり、漢字や片仮名などの新しい学習の習得も早くなってきました。少しずつ数の概念も定着し、計算問題が着実にできるようになりました。

【安芸高田市立吉田小学校】

- 毎週、火・木・金曜日の放課後の45分間、学力F U教員・研究推進教員を含む4人で、第3・4学年14人の児童を対象に放課後学習を実施しました。時間内にできるところまで、次の課題を順に取り組みました。

- | | |
|--------------------|---------------|
| ① 認知機能トレーニング（コグトレ） | ② 読み取り・計算プリント |
| ③ 漢字イラストカード音読 | ④ 家庭学習や課題の直し |
| ⑤ 自主学習 | ⑥ 振り返りカードの記入 |
| ⑦ 帰る前の漢字ドリルの音読 | |

- 主な手立ての例

- ・ 認知機能トレーニング（コグトレ）

学習の土台となる認知機能（写す力・相違を認識する力・数える力等）を強化するために、一人一人時間を計って取り組みました。やり方が分かると自分ででき、みんな集中して取り組み、学習の取りかかりとしても効果的でした。

- ・ 読み取り・計算プリント

短い文章の読み取り問題と計算を基本とした算数科の問題を繰り返しました。文章の内容理解は容易ではなく、言葉の意味の説明などの支援が必要でした。算数科は授業の復習問題を行いました。つまずくと意欲が低下する児童もいましたが、折に触れて学ぶ意味などを説き、粘り強く取り組ませました。

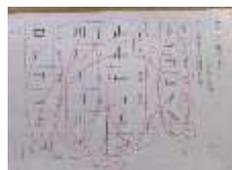
- 児童の変容

- ・ 少しずつですが、分かること・できることが増えてきました。
- ・ 計算・漢字学習に自信が出てきました。
- ・ これまで家庭では「分からない」と言って学習に集中できなかった児童が、一人で黙々と課題に取り組むようになりました（保護者の声）。

【呉市立広小学校】

- 放課後補充学習「スマイルタイム」において、第1・2学年の児童に対して、「漢字の習得」を目指して指導を行いました。

〔読みと筆順〕



- ・ 筆順を1、2、…に加えて、横・たて・かぎなどで覚えさせます。
- ・ 「夕」や「山」などの、学習した片仮名や漢字が新出漢字の一部にある場合には、改めて練習をする。

〔いろいろなパターンで練習〕

- ・ かくれたパーツをさがせ
- ・ 漢字たしざん
- ・ 足りないのはどこ 等



- 児童の変容

繰り返し同じ漢字を練習することで、たしかめプリントでは少しずつ自信をもって書くことができるようになりました。

【府中町立府中北小学校】

- 全教職員が関わり「放課後チャレンジタイム」という名前で、少人数の学習指導を行いました（週3日、放課後30分）。

- 児童の変容

参加した児童からは、「勉強が分かるようになった。」「学校が楽しい。」などの意見があり、児童の分かる喜びに繋がり、学習意欲を高めることができました。また、集中が続かず、教師の指示が通りにくかったり、自信がなかったり、分からないことを「分からない」と伝えることができにくかった児童が、個別指導を受けることで、単元末テスト等でも「知識・技能」「思考・判断・表現」の両観点において、期待値を超えるなど、効果が見られました。

【坂町立横浜小学校】

- 月～木曜日の給食準備中、たし算・ひき算・かけ算の練習プリントを行いました。
- 火曜日の6時間目の時間帯に、標準学力調査40%未満児童を対象に、その日に学習した内容の定着を図るプリントやドリル学習及びたし算・ひき算・かけ算の練習プリントを実施しました（「のびっこ道場」）。

- 児童の変容

反復した学習を継続することにより、技能面の定着を図りました。児童の実態に沿った、スモールステップの課題や学習を行うことにより、児童の分かったことを増やし、自信をもつことにつなげるようにしました。また、個別のファイルを用意し、「がんばったねシール」や「スタンプ」を集めることで、児童の意欲を継続し、主体的に取り組むことができました。

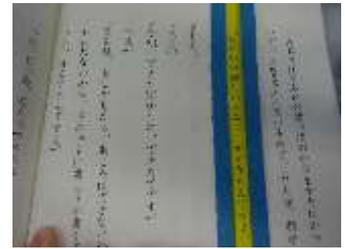


<先生方の声>

- ・日々の授業に加え、継続した取組を行うことで、児童の困り感に寄り添って個別の支援を考えたり、児童の興味・関心に対応した教材や教具を作成したりするだけでなく、これまで支援の必要だった児童や、自分でできる・さらに分かりたいと思っている児童に対して次の学習への意欲喚起をする指導ができるようになりました。
- ・複数の支援材を準備することが大切であると学びました。
- ・児童がノートに書きやすい板書計画を立てられるようになりました。

【神石高原町立三和小学校】

- 読めない漢字があり、音読がスムーズにできない児童や、正しく読んだり書いたりすることができない児童に対して、次のような手立てを行いました。
 - ・リーディングルーラーを活用したり、指さし読み（なぞりよみ）を継続して、どこを読んでいるかを明確にして自分のペースで一人読みができるようにしました。
 - ・翌日の授業で生かせるように、音読練習の機会を増やし、読むことに対する抵抗感を減らし、少しずつ自信がもてるようにしました。
 - 自信をもって授業に臨み、意図的指名による音読発表で、成功体験を味わわせるようにしました。
 - ・音読の際、「立ち止まり読み」で、ここまで気付いたこと・分かったこと・これからどうなるかという展開について話をさせるなど、対話を通して内容の理解を深めさせたり、思考を深めさせることができるようにしました。「～というのは、教科書のどこにどう書いてあるから分かるの？」と問いかけることで、本文を読み返したり、線を引いたりしながら根拠文を見付けるようにしました。



リーディングルーラーを活用することで、どこを読んでいるのかを明確にすることができます。

- 児童の変容

放課後学習で音読などの予習をしておくことで、文字や文章を読むことに慣れ、授業中の理解を深めることにつながりました。

授業中の発表が増え、活躍の場が広がり児童の意欲と自身の向上につながりました。また、思考の場面の根拠となる言葉や文章に線を引きながら読むことができ、自分の考えを深めることができました。

【三次市立八次小学校】

- 第1・2学年（6学級、各2～4名程度）を対象に、「ぐんぐん学習会」という名前で放課後学習指導を週2回実施しました。各学年に分かれ、第1学年は30分程度、第2学年は30～45分程度の学習を行いました。参加児童が「分かった。」「できた。」「楽しい。」と感ずることができる課題設定をし、宿題や、個別の課題、予習・復習等を行いました。

- 児童の変容

授業では、定着が追いつかなかったひらがなの読み書きや、計算、九九などを個別に対応していくことで定着を図ることができました。児童は意欲的に取り組み、放課後学習指導を実施しない日の宿題もやって来る児童が増えました。

＜児童の声＞

分からない宿題ができるから、毎日やりたい。勉強ができるようになるから楽しい。

＜保護者の声＞

ぐんぐんタイムが始まってから、文字に興味をもちはじめ、家でも自分から文字を書いたり、「家族の名前を教えて」と言って書いたりする姿が多く見られるようになりました。